

第
15

海草支部

和歌山市支部

那賀支部

伊都支部

有田支部

紀州さんぽ散珠つなぎ

新宮支部

串本支部

田辺支部

日高支部

鎌倉幕府とつながる、由良の開山『興国寺』

国道42号線の由良駅の北、県道を北西に七百メートル程とると、『興国寺』大門がみえてくる。大門から、木漏れ日の降り注ぐ石畳の参道を歩くこと数十メートル、階段を上り立派な山門をくぐると、宋様式の重層入母屋造りの法堂(本堂)が正面に高くそびえている。法堂は寛政九年(1797)に再建されたとのこと。法堂でお参りを済まし、裏へ廻ると禅堂があり、その中央奥から階段で開山堂(奥の院)へつながっています。奥の院には法燈国師坐像が安置されています。(法堂、禅堂、開山堂は一般参詣者の入堂が禁止されています) 禅堂の左手に源実朝の供養塔、その脇の歌碑に次の様な歌が刻まれています。



大門から石畳の参道へ

打ちはへて秋は来にけり紀の国や

由良の岬のあまのうけ縄

右大臣 実朝

実朝は当地を訪れたことはないそうですが、興国寺との深い関係がうかがえます。その「興国寺の概略」を、今回、資料の提供を受け、ご協力頂いた 大野治氏(由良町在住、興国寺研究の第一人者)の「興国寺案内記」から抜粋して紹介します。



法堂本堂

『興国寺』は、通称「開山」とも呼ばれ、鎌倉三代将軍源実朝(みなもとのさねとも)の菩提を弔うために、家臣の葛山五朗景倫(かつらやまごろうかげとも)によって建立された真言宗西方寺が前進である。



法燈国師坐像(大野氏提供)

景倫は、実朝が暗殺されたのち、高野山に登り、金剛三昧院で出家して、願性(がんしょう)と改めた。由良の庄の地頭「北条政子が彼の忠心を賞(め)でて由良の庄の地頭とした」にもなり、安貞元年(1227)に由良の地に西方寺を建立したのである。

覚心(のちの法燈国師)は金剛三昧院の行勇や道元、円爾(聖一国師)などの高僧について禅の修行に励んだが納得せず、願性の援助で、建長元年(1249)、宋(中国)へ渡り、護国寺の無門仏眼禅師より禅の印可を受けて建長六年(1254)帰国した。

その後、金剛三昧院の六世住職となり、願性より請われて西方寺の住職となり、宗旨を禅宗に改めた。(西方寺は)興国元年(1340)、後村上天皇より興国寺号を授かり、以後、興国寺と呼ばれるようになった。

『興国寺』は天正十三年(1585)、羽柴秀吉の紀州攻めの兵火を蒙り、堂塔の多くを焼失した。その後、慶長六年(1601)妙心寺派の天叔(てんしゅく)和尚により復興されたが、盛時にははるかに及ばなかった。その後の住職も復興に努力し、江戸時代、約百ヶ寺の末寺がある大寺であった。時はながれ、昭和の御世、約五年の歳月をかけて大修復がなされ、昭和六十年二月、妙心寺派に復帰し、同年九月、法燈国師七百年遠諱が盛大に行われました。現住は山川宗元老師です。

境内を一巡し、改めて法堂の前にたつと、鎌倉から遠く離れたこの地に、幕府と縁のある大寺の歴史と荘厳さに、圧倒されます。興国寺は法燈国師が中国から習得し、伝えた「徑(金)山寺(きんざんじ)味噌」「醤油」発祥の地として、また「普化尺八」の本寺としても有名です。

一月成人の日には、「天狗が一夜にして七堂伽藍を建立した」と言う伝説にもとづき「天狗祭」が行われ、にぎわいます。

八月十五日夜には開山以来七百年余りの伝統をもつ、精霊送り行事の灯籠焼(県の無形民俗文化財指定)が行われます。私も以前、二度ほど訪れたことがあります。荘厳で、幽玄の世界に浸ったことを思い出します。



源実朝の供養塔

日高支部 大谷貴穂